

Aiに関する説明は十年間、何遍も繰り返してきた。だがいくら繰り返しても足りないのでめげずに今日も繰り返す。ロジックはシンプルなので是非、理解していただきたい。ここでは2通りの視点からAiを紹介してみよう。ひとつは医療現場もしくは社会制度的な立場から。もうひとつは、死者と向き合う遺族の立場から。

医療現場・社会システムの 観点からのAi

Aiの定義は「死亡時画像診断」である。死亡時の医学検査には解剖という有名な検査があるが、現在の日本での適用率は2%台にとどまっている。

つまり日本では、百人中九十八人が体表からみて死因を決めているわけだ。これではきちんと診断できない、ということは素人でもわかる。そこで技術進歩の著しい画像診断を応用しようと考えた。これがAiだ。なのでCT、MRIなど、画像診断すべてがAiに対応する。Aiを社会で実施するため、「Aiプリンシプル」の遵守が必要となる。

Aiプリンシプルとは、①Aiは医療現場の終点で医療従事者が行う②Aiを行ったら診断レポートを作成し、その情報を遺族と社会にオープンにする③Aiの費用は医療費外から医療現場に支払われる—という三原則だ。

当たり前じゃないか、とお考えの方々は、社会の実態をご存じない。プリンシプルを遵守せよと訴えなければならぬくらい、現場のシステ

ム構築にはポリシーがない。

典型例が法医学者が行うAiだ。法医学者が司法解剖や行政解剖に準じてAiを行うというのは一見合理的に思えるが、その時、市民社会と医療現場は大変なことになる。彼らは独自にAiを実施し、その情報を開示しない。法医学者が調べた死因は捜査情報で、死因情報が肝心の遺族と市民社会に伝えられないのだ。現実には医療事故裁判では、死因の真相を知りたいのに法医が死因の情報開示をしないため、やむなく医療裁判を起こす遺族も多い。

これは作り話ではない。Aiに関しても、遺族がAi情報を依頼しても、事件性の有無も定かでないのに、画像を遺族に渡さないという法医学教室も実在する。こうなると捜査が市民社会の健全さを阻害するという、大変困った事態だ。問題を解決するのがAiの実施と情報管理を医療現場で仕切るという新しいパラダイムの構築である。こうでもしないと市民は司法に食い殺される。

そうした危惧が私に『アリアドネの弾丸』を執筆させた。出版直後は、警察がそんなことをするはずがない、ナンセンス・ミステリーだなどという感想も散見したが、一月後、大阪地検特捜部の証拠捏造事件が発覚し、そうした感想は影を潜めた。

遺族の立場からのAi

続いては遺族の立場から。突然家族が亡くなったとき、遺族は納得できないケースもある。その時、死因がわかれば納得できるし、正確な死因の理解は哀しみの軽減にもつなが

る。だが、正確な死因がわかるためには遺体を医学的に調べなければならず、現在は解剖しか方法がない。だが遺族は、これ以上遺体を傷つけないと願う。このため解剖を拒否し、結局死因が不明のまま弔われてしまうことも多い。

もし、Aiシステムが存在していたらどうだろう。遺族は、亡くなった家族の遺体を切り刻むことなく死因が判明することを歓迎する。CTで3割、MRIで6割の死因がわかる。それでは低いと解剖学者は非難するが、解剖でも死因確定率は7割から8割だ。

つまり解剖しても1、2割の死因は不明なのだ。すると遺体を傷つせずに3割～6割の死因がわかるAiを実施して納得してもらい、死因がわからなければ解剖へ、という流れに反対する人はいないはず。この考え方を「Ai優先主義」と呼ぶ。だが驚いたことに、この考え方に反対する人たちがいる。

Aiをしても必ず解剖しなくてはならない、と主張する人たちは私は「解剖至上主義」と呼んでいるが、その人たちのAiアレルギーはとて強い。彼らが新しいシステム構築に消極的な霞が関の官僚たちと結託し、Aiの適切な社会導入を阻害す

る。これが現状だが、解剖至上主義者の数は少ない。法医学会の上層部、病理学会の上層部の一部だけ、おそらく日本全体で二十人もいないだろう。だが困ったことに、彼らはなぜか官僚と仲良しで、その声が国の方針を決定したりする。そのため今日も、家族の死因を調べてももらえず涙している市民が生まれる。

Aiの精神は、透明性、迅速性、中立性、平等性の4つである。だからAiを導入して困るのは、何かを隠したい、ズルをしたい、後ろ暗い人たちである。そうした人たちが学会の上層部に多いという事実が、この国を暗くしている。かなしいことである。

だが、私は未来は明るいと思える。今日も私の著作を読み、ひそかにAiの理解者が増え続けている。その風をひとつにして、各地域にはAiセンターが次々に創設され、銀座のど真ん中に、それらを包括するAi情報センターも樹立されている。

大きな社会の流れが出現する日は、もうすぐそこまで来ているのだ。

今月号から「Aiのいま」をテーマに、10回にわたり連載する予定です。

Kaido Takeru

2000年、Aiの概念を提唱。2006年、「チーム・バチスタの栄光」で第四回「このミステリーがすごい！」大賞を受賞。2008年「死因不明社会」で科学ジャーナリスト賞受賞。最新作は「モルフェウスの領域」角川書店。

